

2019年度11月 実施 デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラムに関するアンケート調査結果

* 実際のアンケート調査用紙は別紙をご覧ください



【目的】

国際バカロレア機構と文部科学省は、日本におけるIBの普及に向け「デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラム(以下、「日本語DP」)」プロジェクトを共同で実施している。日本語DPでは、6科目のうち最大4科目まで、日本語で履修することが可能である(2科目以上は英語で履修)。この日本語DPについて状況を把握し、今後の国際バカロレア推進に活用するためにアンケート調査を実施した。

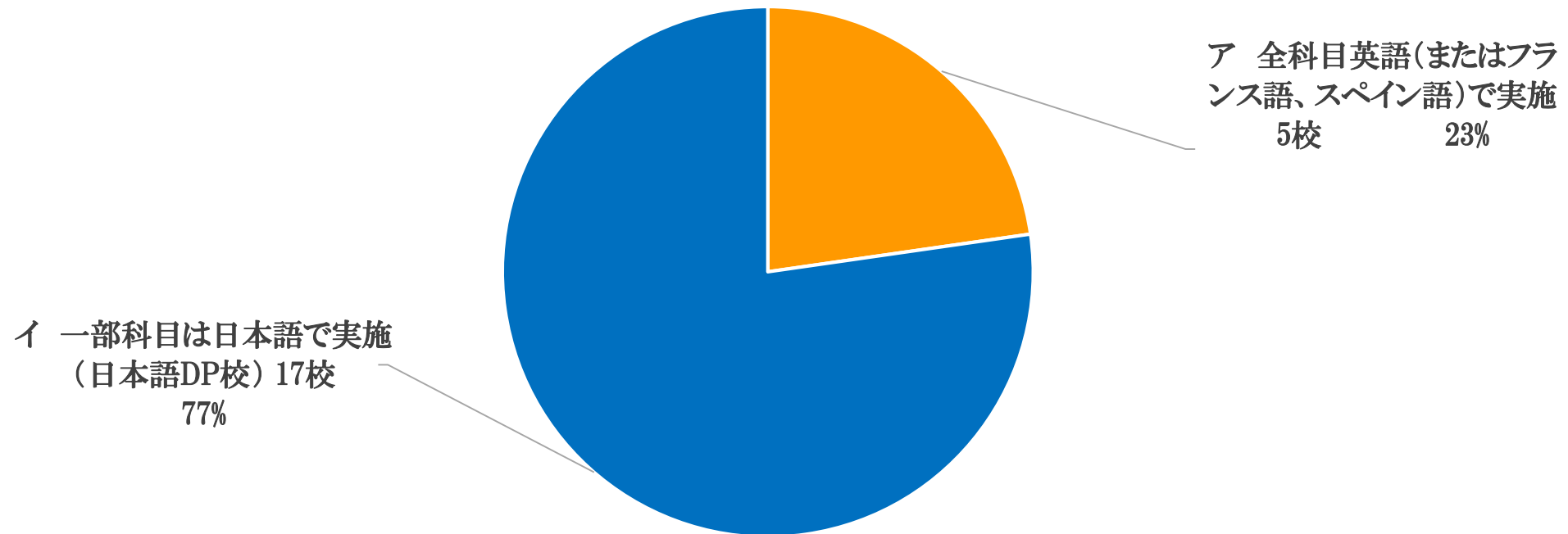
【調査対象】

日本国内の国際バカロレア・ディプロマ・プログラム認定校・候補校・関心校のうち、学校教育法第一条に定める学校(以下、「一条校」)を対象に実施

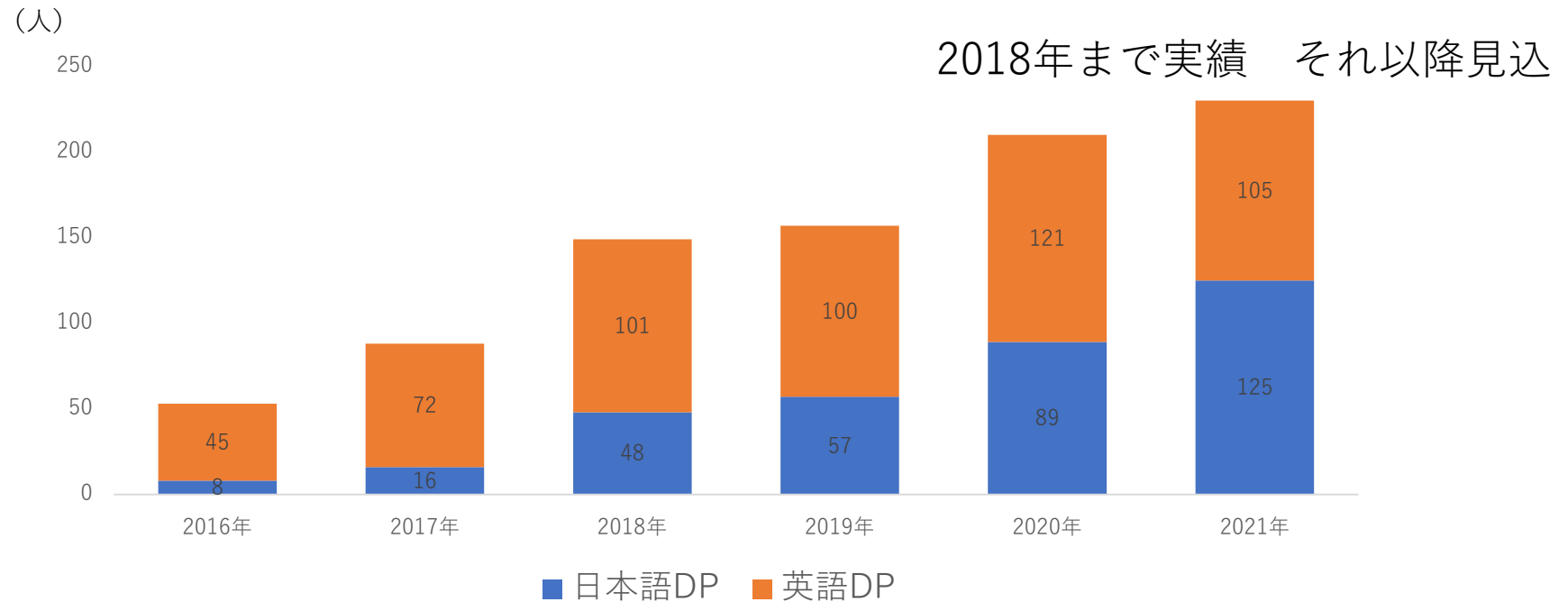
有効回答数 22校 (認定校:21校 その他:1校) 【2019年12月10日現在】

【Q1】 貴校は国際バカロレア・ディプロマ・プログラム(以下「IBDP」)について、グループ1、2以外の科目をどの言語で実施していますか/したいと考えていますか。どちらか一つを選んで御回答ください。

- ア 全科目英語(またはフランス語、スペイン語)で実施
- イ 一部科目は日本語で実施(日本語DP校)



【Q2】 貴校のIBDP履修者数の推移を御記入ください

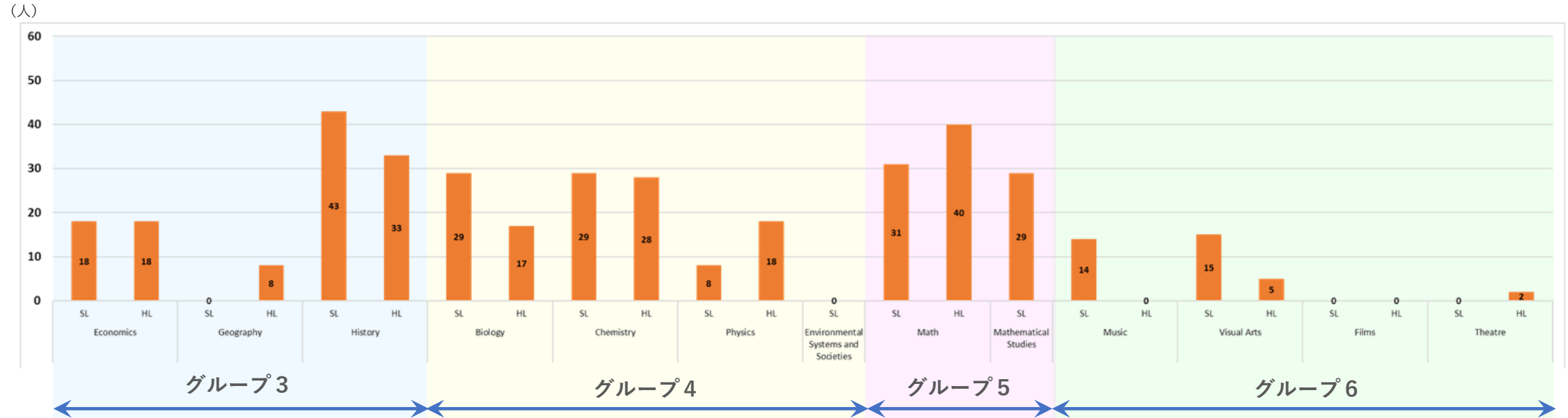


	2016年	2017年	2018年	2019年 (現高3)	2020年 (現高2)	2021年 (現高1)
日本語DP (人)	8	16	48	57	89	125
英語DP (人)	45	72	101	100	121	105
合計 (人)	53	88	149	157	210	230

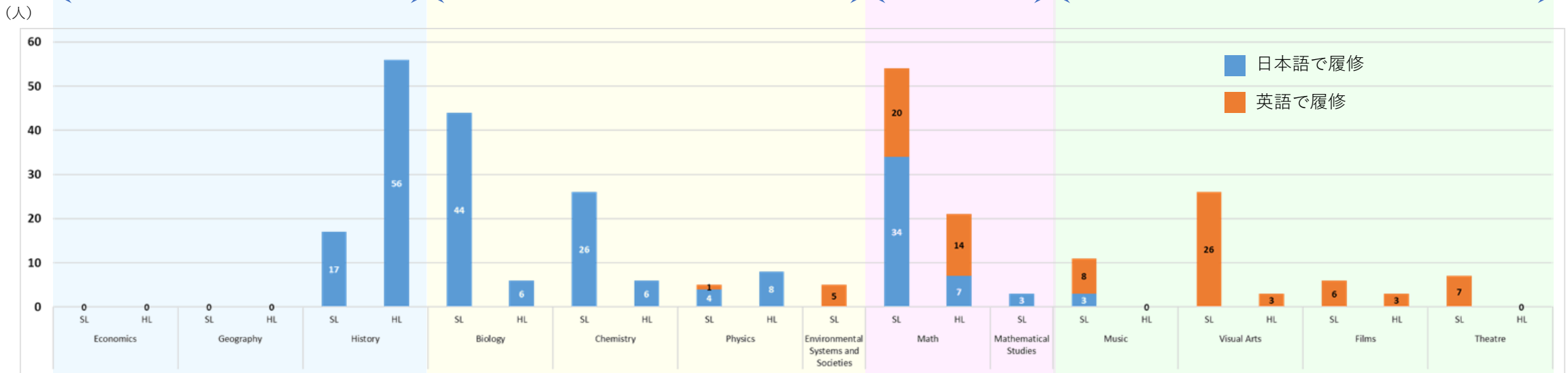
1条校における日本語DPの人数の伸びは大きく、2021年受験では英語DPの人数を抜く見込み

【Q3】 2019年卒業生(現高3生)について、以下に指導言語と科目履修人数をご記入ください。

英語
DP校

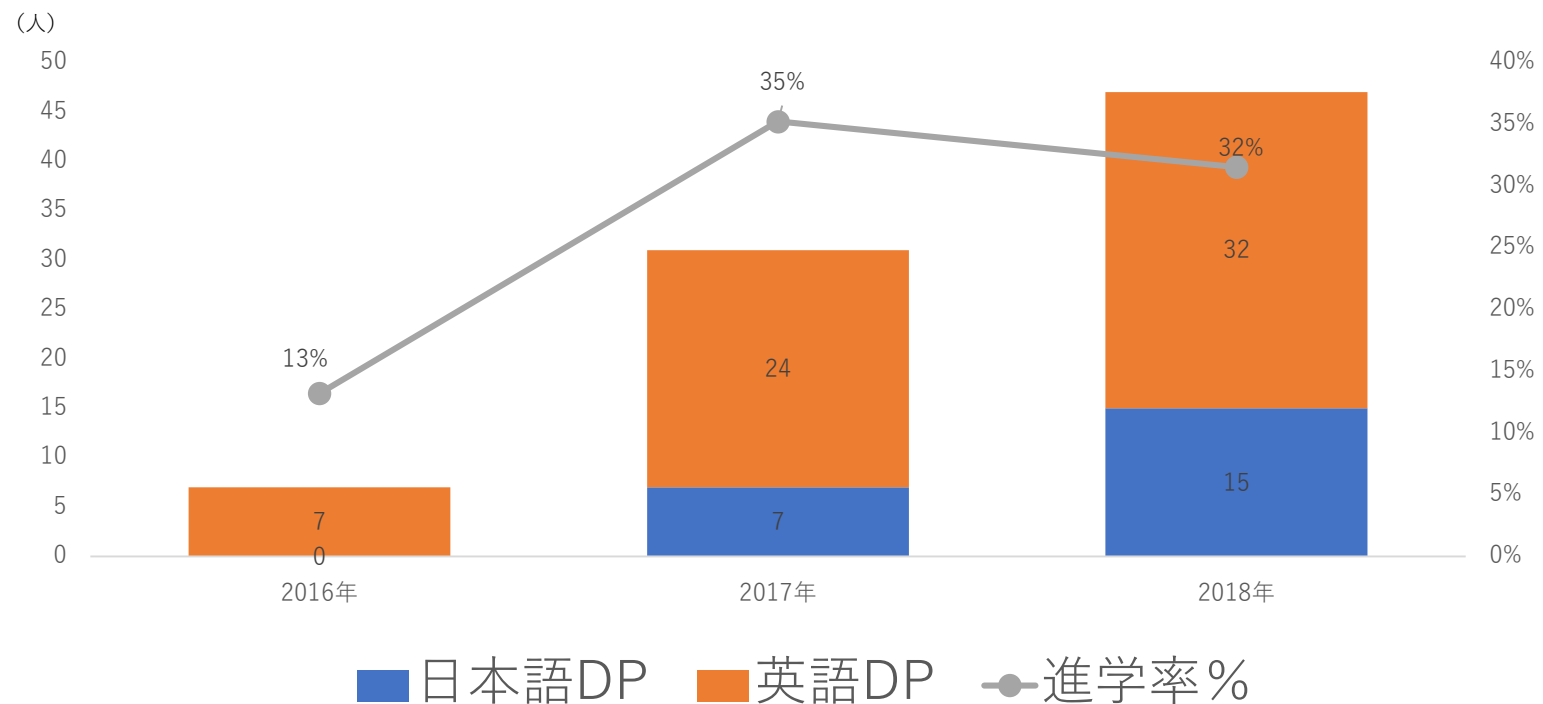


日本語
DP校



日本語DP校では数学や芸術科目等を英語で履修しているケースが多い

【Q4】 貴校のIBDP履修者のうち、海外の大学等高等教育機関に進学した人数を御記入ください。



	2016年	2017年	2018年
日本語DP	0	7	15
英語DP	7	24	32
履修者計	53	88	149
進学率%	13%	35%	32%

英語、日本語DPとも海外進学実績を着実に伸ばしつつある

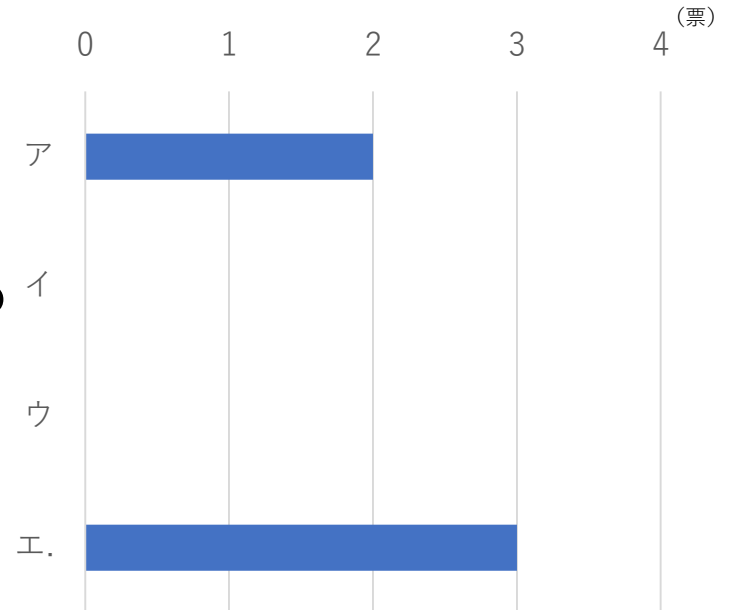
以下、英語DP校のみへの質問

【Q5-1】英語等でIBDPを実施している理由について、以下の選択肢の中から当てはまるものを全て御回答ください(複数回答可)

- ア 生徒により高度な英語等の語学力を身に付けてもらうため
- イ 留学生等の日本語母語話者でない生徒を積極的に受け入れるため
- ウ 学生または保護者のニーズに応えるため
- エ その他

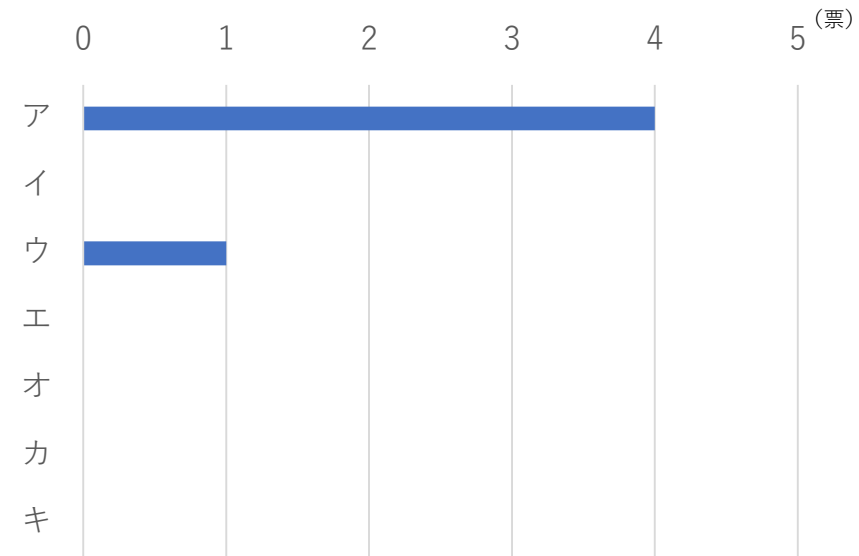
- 英語イマージョン校としてスタートしたため
- 海外大学への進学を促すため
- 設立当初は、日本語DPは始まっていなかったため

英語DPを選択する理由としては、教育ニーズに応じて海外進学も視野に、英語力を伸ばすこと等が主な目的となっていると考えられる



【Q5-2】英語等でのIBDPの実施にあたって、課題が御座いましたら、以下の選択肢の中から当てはまるものを全て御回答ください(複数回答可)

- ア 英語等で授業する教員の確保
- イ 英語等で授業する教員の負担
- ウ 英語等で履修する生徒の確保
- エ 英語等で履修する生徒の負担
- オ 教材の選定・作成
- カ 特に課題として感じていることはない
- キ その他

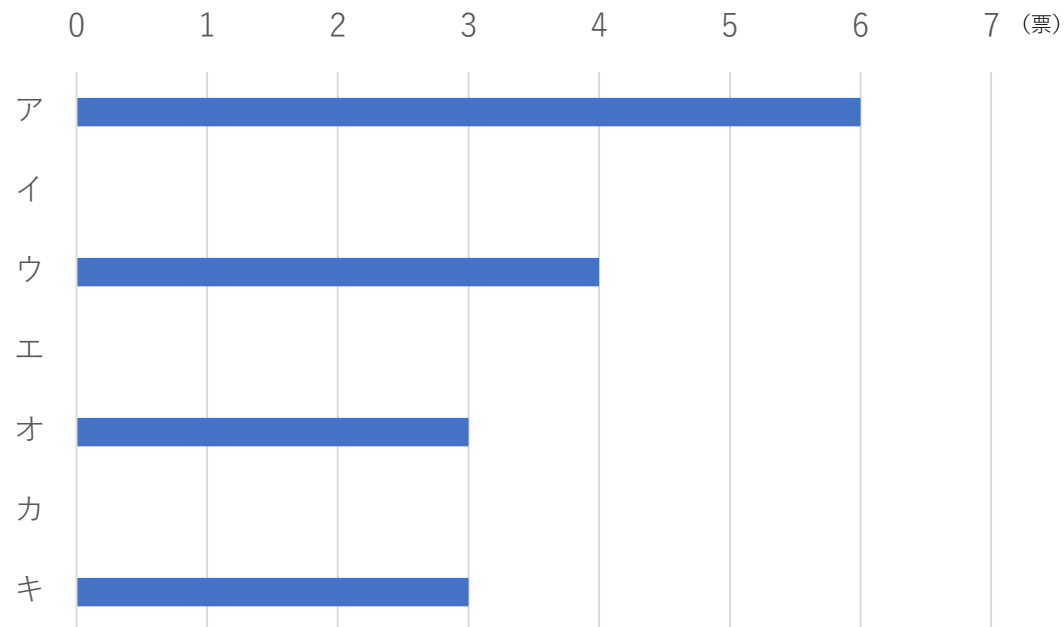


英語での実施には教員の確保をはじめ、教える側の組織体制や人材政策の観点から課題があると捉えられる

以下日本語DP校のみへの質問

【Q 6-1】日本語DPを実施している理由について、以下の選択肢の中から当てはまるものを全て御回答ください(複数回答可)

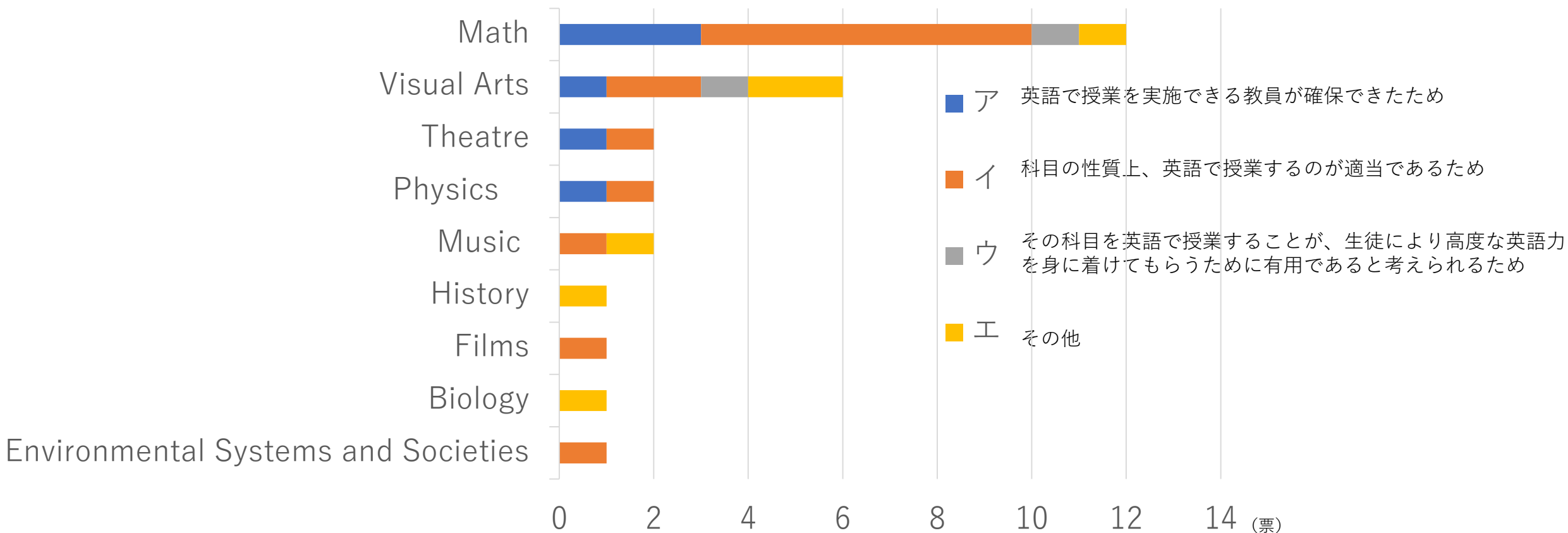
- ア 英語で授業できる教員を確保することが難しかったため
- イ 英語等で授業する教員の負担が大きいため
- ウ 全科目英語で受講するのは生徒にとって負担が大きすぎると考えられたため
- エ 英語等で履修する生徒の確保が困難であると考えられるため
- オ 日本語での授業の方が生徒の理解が高まり、教育効果が高いと考えられるため
- カ 日本語DPの方が好成績をとりやすく、進学上有利と考えられたため
- キ その他



- IBDPには現在日本が目指す教育改革のヒントが多く含まれているが、すべて英語で実施すると日本人教員のかかわりが希薄になり、日本人教員がIBDPの長所を身に着ける機会が少なくなるため。
- 学校の環境が日本語であるため、日本語ができない外国籍の方が雇用できない
- 公立校として、外国語のネイティブ教員に頼るのではなく、現職の日本人教員が授業を担当することが持続可能な組織として重要だと考えるため。
- 校長の決定による

日本語DPを積極的に進める理由としては、前出の英語DPでの教員側の課題に加え、生徒にとってのメリットがあるという観点が窺える

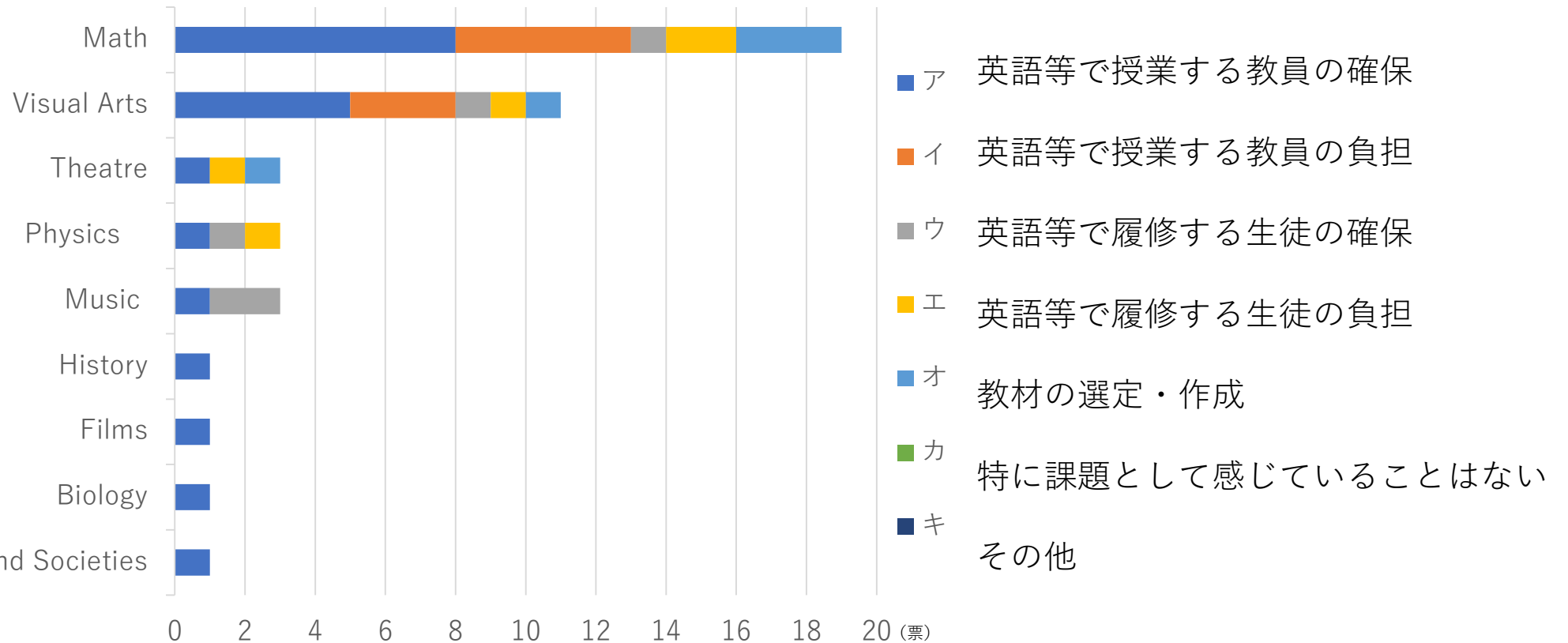
【Q6-2】グループ3からグループ6の科目のうち、英語で実施している科目名と、英語で実施する科目としてその科目を選んだ理由を御記入ください(複数回答可)



【その他の回答について】

- 英語で実施しても比較的、生徒が理解しやすいため。
- 留学生に対応するため
- 本当は日本語で実施したいが日本語DPの制約上、二科目は英語で履修する必要がある。消去法で数学を選択している。日本語を母語としている生徒が本校の場合は大半で他科目を英語で行うよりは数学の方がよいと考えている。

【Q 6-3】上記で挙げた科目について、英語での授業実施に際して課題が御座いましたら、以下の選択肢の中から当てはまるものを全て御回答ください(複数回答可)

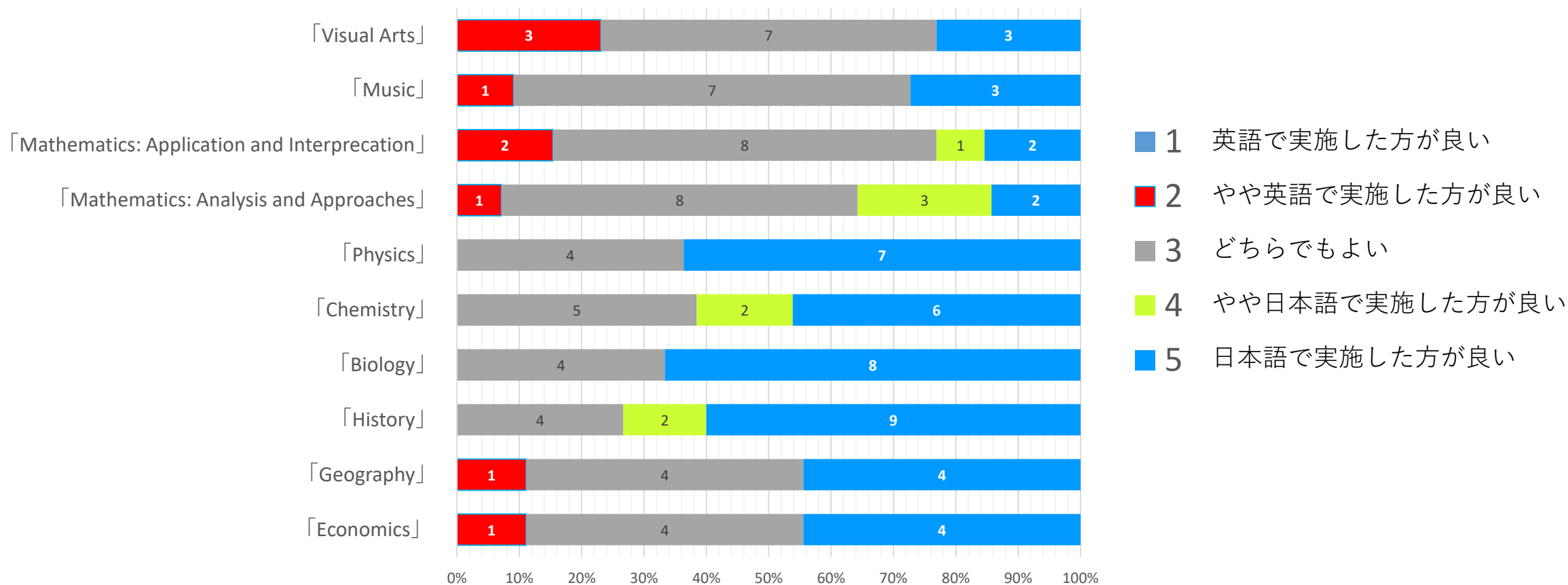


【補足コメント】

- 物理SL、音楽SL、美術SLを取っているのは生徒一人しかいない
- 関心校なので、実施しているわけではないが、できるだけ母語による資質能力育成がしたい。英語で取り組む科目は生徒にとって最も負担が少ないものを工夫したい。
- 日本人の生徒が、評価で求められる英語運用能力に達することが難しい。
- ア:日本語ができないと学校の仕事ができない。イ:英語力ができる日本人は自分の専門を英語で教えるため言葉が大変
オ:逆ですが日本語に訳されたものが少なく、DLDPの授業の準備が大変

日本語DPで英語による実施にあたっての主な課題は、教える側の組織体制や人材政策の観点から課題があると捉えられている

【Q 6-4】上記の課題が解決された場合、生徒への教育効果を最大限高めることや、進学上の選択肢の多様性を確保することなど、IB教育を最も生徒にとって有益な形で提供するには、どの言語でIBDPを実施するべきとお考えでしょうか？ 以下の1～5のいずれか一つを選択して御回答ください。



生徒のメリットを考える上では、概ね日本語で実施することが適当であるとの意見が多いが、数学、芸術科目、地理、経済については、英語で実施する方がよいとの意見もある。

【Q 7】日本語DPを実施する中で、少なくとも二科目を英語で授業して良かった点、悪かった点、その他お気づきの点について御自由に御記入ください。

●良かった点：

【英語力の向上について】

- 英語と該当教科を同時に学ぶことができ、「英語で説明する力」が身に付いた。
- 英語を、言語習得が目的である授業以外の、オーセンティックな学びの場で活用できること。
- 英語運用能力が至便に身につく(英語の外部試験でも実証)
- 英語力アップをしようと生徒の意識が高まりました。英語が得意な生徒は3科目英語で受けています。
- 英語力の担保が図れるから

【海外進学について】

- 海外進学の実験が広がると同時に、大学進学後の学びにもつながる、という実感を生徒が持っている。
- 海外大学進学を目指す上でAcademic Englishが向上する。学習言語としての言語運用能力を2言語で高められる点

【その他】

日本の学校にIBDPを導入する上で4科目を日本語で日本人教員で指導できるということ。

●悪かった点：

【科目の特性について】

- art(グループ6)に英語力がないとよいスコアがとりにくい

【語学的な観点から】

- あえていうならば、「バイリンガル度」がやや低めになる。
- 評価は英語の母語話者と同じ水準で行われること。グループ2のEnglish Bよりも高い英語運用能力が求められ、高得点が望めないこと。

【生徒、教員への負荷について】

- 英語での授業を担当している教員の負担が大きい点。概念的理解が浅くなる。
- 言語の壁により能力を発揮できない生徒が出てくる。教員の獲得が難しい。教材が少ない。
- 高い英語力がDP選択の条件となるため、英語が苦手な生徒はDPを挑戦しなくなります。
- 生徒にとって専門用語の習得が難しく準備が大変である。また、ディスカッション等の活動が難しい。
- 生徒も教員も英語で英語以外の科目を教えることに苦労している。

(前頁続き)

【Q 7】日本語DPを実施する中で、少なくとも二科目を英語で授業して良かった点、悪かった点、その他お気づきの点について御自由に御記入ください。

●お気づきの点:

【指導言語について】

—IBでは、「グループ1, 2以外の科目で、1科目を英語での試験」としているだけで、「英語での授業」を指定している訳ではないと判断しています。日本語DPでは、英語力がままならない段階で、数学を英語で実施した場合、結局数学力も定着させにくいと聞いた事があります。ですので、「英語で授業をやる」ことに縛られないほうが良いかと思えます。

【教員の確保について】

—英語で実施する科目の担当者として外国籍のスタッフを雇わなくてはいけないこととなる可能性が非常に高くなります。
—多くの日本語DP校が数学を英語で教えることを検討している。それを教えられる教員は多くないため、人材争奪戦になることを強く危惧している。

【学習意欲について】

—長期的に見てメリットと考える生徒が多く、英語が好きな生徒は数学(本校で英語で実施しているG1,2以外の科目)に対してもモチベーションを持つようになってきた。発表等の活動も慣れてくればできるようになる。

【全科目の日本語実施について】

—日本語での授業においても英語のテキストを使用できているのは、2言語で実施しているため。もし全DP科目が日本語のみになってしまったら、各科目で英語で書かれたテキストを使うことへの抵抗感が大きくなる可能性がある。

【Q8】その他、日本語DPに関して御意見等ございましたら、御自由に御記入ください。

【「日本語DP」という表現について】

—「日本語DP」という呼称は「日本語のみでDPを実施する」と中学生・保護者が誤解する恐れがあるため、「DLDP」(両方の言語で実施する)という、IBと同じ呼称を使用しております。ご検討いただけると幸いです。

【教員の確保について】

—English B以外を指導できるEnglish Speaking Teacherの確保はやはり難しいです。文科省にはそのサポートシステムの構築をお願いしたい。また人材開発と、学内IB教育理解を推進するため、公式ワークショップの無料化を再度実現していただきたい。

【教材について】

—日本語の教材がまだまだ限られていたり、IB機構とのやり取りなども英語であったり、日本人の英語教師が他教科の教師のために翻訳を行うことが多々あり、負担が増えていること。

—英語力の高くない日本人教員が指導しやすいように指導環境や教材にサポートがもっとほしい。

【大学進学について】

—IB入試を導入する国内の大学がさらに増えることを希望します。また、大学が設定する条件や点数が高い大学がありますが、それにより進学先を海外の大学に変えるDP生がたくさんいるようです。国内の大学には、よりDPに開かれたIB入試を検討し、多くの才能ある学生を受け入れて欲しいと思います。

【日本語・英語によるDPについて】

—切実な要望として、二科目を英語で履修しなくてはならないという決まりを一科目にしてほしい。それが日本でIBを普及させるために不可欠だと考える。

—日本語でも英語でも、忙しい教育内容であるので言語によるちがいはない。

—日本語で履修し、思考力育成型の教育を受けるチャンスができたことはありがたい。